

# 博士論文の内容の要旨

専攻名 国際学研究専攻

氏名 スバゴジョエワ アセリ

本論文では、言語類型論から見て互いに類似している日本語とキルギス語に着目して日本語の進行アスペクトを表す「～テイル」の観点からキルギス語のテンス・アスペクト形式の分析を試みた。日本語のアスペクト研究は、スル・シテイルといった形態論的な対立に基づいてアスペクト的意味の対立を中心に研究が進められてきたのに対して、本論文は、キルギス語が補助動詞によって表される動作の局面に着目し、本動詞の語彙的アスペクトを中心に分析を行った。具体的に日本語の進行アスペクト「～テイル」形式に対応するキルギス語の4つの補助動詞を含む形式V-(i)p jat-、V-(i)p tur-、V-(i)p otur-、V-(i)p jür-を研究対象として、その使い分けをはじめ、どのような文法的な意味を表すかについてテンスの観点も含めて論じたもので、序章を入れて、全部で5章からなる。以下に、各章の内容とその成果を概観する。

序章では、本論文における研究の背景、研究の対象、研究の目的と方法、キルギス語の文法的特徴と音声的特徴、本論文で扱う「補助動詞」及び本論文の構成について説明した。研究の目的は、日本語の進行アスペクト「～テイル」形式に対応するキルギス語の文法形式及び本動詞Vに副動詞-(i)p が添えられたあとに生じる補助動詞の jat-、tur-、otur-、jür-について実例に基づいて分析と考察を行い、それぞれの補助動詞の文法的な意味と使用される環境を考察し、進行アスペクト現象とそれに関連する事象を明らかにすることである。研究の方法として、言語使用の実体を把握するという必要性から、用例を収集し、分析するという方法を取った。また、補助動詞とは、複合動詞の形式であって、本動詞によって表される意味を文法的な面から補助する形で用いられる動詞群のことである。

第1章では、まず一般言語学から見た動詞のアスペクト・テンスについて確認し、ロシア語における「アスペクト」と「体」のうち主にロシア語の不完了体の文法的な意味を紹介した。第2節では日本語のアスペクト研究の現状と日本語の基本的なアスペクト体系を明確にした後に、文法的アスペクトの研究として工藤（1995）、語彙的アスペクトの研究として金田一（1950）と奥田（1977）を取り上げ、「～テイル」と運動動詞の相関関係を中心に述べた。第3節では、キルギス語のアスペクト的な補助動詞に関わる記述をし、V-(i)p jat-、V-(i)p tur-、V-(i)p otur-、V-(i)p jür-形式のそれぞれの本動詞としての意味について考察した後に、V-(i)p jat-、V-(i)p tur-、V-(i)p otur-、V-(i)p jür-に関する先行研究の問題点を指摘した。

第2章では、基本的に主節に現れるキルギス語の補助動詞を言語資料に基づきV-(i)p jat-、V-(i)p tur-、V-(i)p otur-、V-(i)p jür-形式の場合に生じるそれぞれの文法的な意味について考察した。考察に当たり、本動詞の語彙的な意味に基づいた分類として動作動詞、変化動詞、

状態動詞、内的感情動詞という4つの分類に従い、分析した。第2章の内容は概ね4つの部分からなる。第1節では、動詞の分類ごとにV-(i)p jat形式の動作動詞、変化動詞、状態動詞、内的感情動詞の場合に生じる文法的な意味について考察した。第2節では、同一の分類法でV-(i)p tur-形式の場合について考察した。さらに同一の分類法を用いて、第3節ではV-(i)p otur-形式について、第4節ではV-(i)p jür-形式についてそれぞれ考察した。

第3章では、日本語の従属節を出発点にして、キルギス語の従属節のテンス・アスペクトの形式を比較対照した。第1節では、日本語の従属節のテンス・アスペクトについて概観し、日本語とキルギス語の従属節の持つアスペクト的特徴について分析を試みた。第2節では、日本語とキルギス語の従属節のテンス・アスペクトの比較対照を日本語のトキ（ニ）節と共起する主節のテンス・アスペクトを「ル」形と「タ」形、「テイル」形と「テイタ」形の4種類に分けて考察した。本研究の対象である4つの補助動詞は、主節の述語に来る場合と同様に従属節にも現れ、「-(i)p jat-kanda、-(i)p tur-ganda、-(i)p otur-ganda、-(i)p jür-göndö」の各従属節について、比較対照を行った。さらに、第3節では、共起的時間関係を表すアイダ（ニ）節を中心に、第4節では、継起的時間関係を表すマエ（ニ）節、アト（デ）節を中心に比較対照を行った。

最後に第4章では、この論文の各章で論じた日本語とキルギス語の進行アスペクトについてまとめた。また、本論文の成果を示した上で、「～テイタ」を新たな研究対象とするなどの今後の課題を述べた。

# 論文審査結果の要旨

専攻名 国際学研究専攻

氏名 スバゴジョエワ アセリ

## 1. 審査概要

### 1) 予備論文審査

学位請求のための予備論文「進行アスペクトとテンスに関する日本語とキルギス語の対照研究」は2016年3月11日に提出された。この論文に対して、国際学研究科教員の審査委員5名からなる予備論文審査委員会が設置され、4月12日に同委員会が開催された。

博士論文としての内容・構成・表現などについて、各委員が意見を述べた上で、面接を実施して、教育的な観点から以下のような指摘を行った。日本語の「～テイル」を出発点にキルギス語のアスペクト・テンス体系を考察し、キルギス語との比較対照から日本語の従属節が示すテンス・アスペクト体系の特徴についても論じている点に独創性が見られる。しかし、章のタイトルや注のつけ方、専門用語に関する説明、字体や数字などの体裁、参考文献の引用や用語の統一、より正確な記述と説明力、第1章での先行研究の成果と問題点を明確にふまえて本分析の特徴をより明示的に述べて第2章以降へと展開していくこと、第3章と第4章の充実について改善すべきとの指摘があった。以上を総合した結果、学位論文の審査請求に値するという合意が得られた。

### 2) 学位論文審査

学位請求論文は2016年6月16日に提出された。これを受けて、予備審査委員会と同じ5名の構成員に学外審査委員1名を加えて計6名からなる学位審査委員会が2016年7月20日に開催され、第1回委員会、口述による最終試験、第2回委員会を実施した。

#### (1) 第1回学位審査委員会

予備論文審査において指摘された以下の改善事項を確認した結果、いずれも改善が認められ、全員一致で最終試験を行うことにした。

- ①本分析の特徴をより明示化して第2章以降での考察と比較対照へとつなげていく。
- ②第3章と第4章の内容を充実させ、第4章では本論文の成果についてより強調する。
- ③説明力を高めて正確な記述を行い、体裁と表現を整えて説明を明確にする。

#### (2) 最終試験

最終試験は第1回学位審査委員会に引き続いて行われた。最初に著者のスバゴジョエワアセリ氏に対して本論文の概要、独創性、予備論文での指摘事項がどう改善されたかを

中心に説明を求め、その後に質疑応答を行った。具体的には、論文の締めくくりとして成果をまとめた説明文の表現、専門用語の定義、日本語とキルギス語における従属節の扱い方、明示的な表の提示、キルギス語の補助動詞と本動詞との間に見られる文法化の進行度、ロシア語文法依存からの脱却の度合い、説明の正確さと分かりやすさ、説明の量的なバランスなどについての質疑と応答がなされた。軽微な修正を必要とする箇所が少し見られたが、大筋において問題がないことを確認した。

### (3) 第2回学位審査委員会

論文審査および最終試験でのスバゴジョエワ氏との質疑応答の結果から、本論文について最終的に以下の評価がなされ、博士後期課程の論文評価基準に照らして、学位論文〔博士(国際学)〕の要件を満たしているとの結論に達した。

- ・ 予備審査において改善が求められた事項のほぼ全てが改善されている。
- ・ 第1章で先行研究の成果と問題点を明確にふまえ、本分析の特徴をより明示的に述べた上で、第2章で日本語の進行を表す「～テイル」の観点からキルギス語の補助動詞(jat-, tur-, otur-, jür-)を考察して、キルギス語のアスペクト・テンス体系を詳述したこと、さらに第3章では日本語とキルギス語の従属節におけるテンス・アスペクトを比較対照したことにより、論文全体のつながりがよくなっている。
- ・ 第3章では日本語の従属節と主節のテンス・アスペクトを包括的に扱い、キルギス語との比較対照を行って内容の充実をはかり、第4章では本論文の成果を章別だけでなく、論文全体としても述べ、理論・記述・日本語学習の観点からその意義を強調している。
- ・ 論文全体を通して、章のタイトルや注のつけ方、専門用語に関する説明、字体や数字の体裁、文献の引用や用語の統一、正確な記述と説明力の点でも改善が見られる。
- ・ 本論文は、日本語の「～テイル」を出発点にキルギス語の補助動詞が示すアスペクト的な意味を本動詞の語彙的意味や文脈と関係づけて論じた点に独創性が見られる。そして、本動詞と補助動詞を軸とする形式が現在時制に限らないこと、＜変化の結果の状態＞という意味を表す場合もあること、動詞と補助動詞の組み合わせにより文法化に差が見られることなどの新しい事実の指摘もある。
- ・ 日本語の従属節が示すテンス・アスペクトの視点から、キルギス語の従属節が示すテンス・アスペクトの諸特徴を比較対照した点にも独創性が見られる。例えば日本語では主節の動詞が現在形だと従属節で動詞の過去形が許されないが、キルギス語ではそうした制限がない。また、チュルク諸語では従属節がほとんど研究されていない中でキルギス語における従属節研究は貴重である。キルギス語から見ると日本語のテンス・アスペクト形式は融合的・包括的であり、文法化が進んでいるとの新たな指摘もある。
- ・ 今後の課題を含め、言語学と言語教育の両面でさらなる研究の発展が期待できる。

## 2. 審査結果

以上により、本審査委員会は、スバゴジョエワ アセリ氏の提出した学位論文が博士（国際学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。